

第27回 日本保健科学学会学術集会 プログラム

1. 学術集会長：森島 健（東京衛生学園専門学校）
2. 会 場：首都大学東京 荒川キャンパス（〒116-8551 東京都荒川区東尾久7-2-10）
3. テ ー マ：「ウェルネスを考える」
4. 開催日時：平成29年9月30日（土）12:00-18:00

タイムテーブル

	大視聴覚室	講義室1（182）	講義室2（183）	講堂		
11:00	受付 11:00～12:00		ポスター貼付 11:00～12:30			
11:30						
12:00	日本保健科学学会優秀賞・奨励賞受賞講演 12:00～12:30				都民公開講座 (共催:公益社団法人東京都理学療法士協会) 15:00～16:30 「健康生活を送るための秘訣と その実践」 講師：木下博勝氏	
12:30	シンポジウム 12:30～13:50 「ウェルネスを考える」					
13:00	シンポジスト：山田 実・河原加代子・ 大嶋伸雄・白川崇子					
13:30	司会：森島 健		一般演題発表（ポスター発表） 14:00～15:00			
14:00						
14:30			一般演題発表（口述発表1） 16:40～17:40			
15:00						
15:30						
16:00						
16:30		一般演題発表（口述発表2） 16:40～17:40				
17:00	一般演題発表（口述発表1） 16:40～17:40					
17:30	閉会式 17:45～18:00		ポスター撤去 18:00～18:30			
18:00						
18:30						

* 学術集会長賞・ポスター賞の表彰は閉会式で行います。

シンポジウム「ウェルネスを考える」 12:30~13:50 大視聴覚室

「高齢者のウェルネスを促進する」
「在宅療養者のウェルネス」
「自分の思考と身体認知を客観視することで得られる至高のウェルネス」
「骨粗鬆症の診断と治療」

司会：森島 健 東京衛生学園専門学校
山田 実 筑波大学大学院
河原加代子 首都大学東京大学院
大嶋伸雄 首都大学東京大学院
白川崇子 首都大学東京大学院

高齢者のウェルネスを促進する

山田 実 筑波大学大学院人間総合科学研究科生涯発達専攻

2017年時点で我が国の高齢化率は27%を超え、世界随一の長寿大国として超高齢社会を突き進んでいる。この中で、約10年前からは介護予防事業が本格的に導入され、高齢者の健康寿命延伸のために改めて「運動」の重要性が唱えられることとなった。近年では、運動には身体機能を向上させるいわゆる直接的な効果だけでなく、認知機能や精神機能の向上にも寄与することが報告されるようになり、とりわけ高齢者に対しては運動の副次的効果にも大きな期待が寄せられている。本シンポジウムでは、フレイルやサルコペニアをキーワードに高齢者に対する運動の効果を整理するとともに、地域包括ケア時代における介護予防の在り方について検討を行う。

在宅療養者のウェルネス

河原加代子 首都大学東京大学院人間健康科学研究科看護科学域

長い療養生活を送るなかで、療養者は自力で体位を変えることもできなくなってくる。身体は壊れていくものだが、心は安寧（よい状態にある）ことが在宅で療養する人にとって何にもまして代えがたい。本日は、療養者の心を安寧にむかわせる看護ケア、療養者の知覚に働きかけるケアについて皆さまと考えたい。

知覚に働きかけるケアの中でも、皮膚という感覚器をとおして皮膚感覚を刺激することは、療養者の不動による苦痛を和らげ、心地よさを引き出す有効な方法である。皮膚刺激から起きる脳への影響は、療養者が意識的に呼吸をコントロールすることにつながる。「快」の皮膚刺激は副交感神経を優位にさせ、深い、ゆったりとした呼吸を促すリラクゼーション効果をもたらす。療養者がこれまでのように外出することが困難になっても気分転換や気持ちをすっきりさせる等のからだの心地よさをとおして、療養者の心を解放するような、外へ向かわせるケア（技術）である。現在、『せなかのオイルセラピー』（10分間）のプロトコルを作成、シミュレーション実験中である。実験では、人間の呼吸、心拍、自律神経系などの生理的变化を測定、可視化することにより、心身の安寧を客観的に観察する手がかりになればと期待している。

自分の思考と身体認知を客観視することで得られる至高のウェルネス

大嶋伸雄 首都大学東京大学院人間健康科学研究科作業療法科学域

WHOの提唱する“Wellness”は健康の定義から踏み込んだ“健康観”を意味する。それまで健康で健常だった人間が、突然、大きな疾病や障害をもったときにその意味を深く思考する概念である。しかし残念ながら、健常であったときに“健康観”を意識的に維持し、さらに実践することは多忙な現代人にとって容易なことではない。さて、ここで述べる理論はまだ仮設の段階であるが、人間には少なからず死生観と人生観が存在し、それらの基盤として健康観が位置づけられる。人生の長さやライフステージを意識しながら、自分の人生の目的をもち、主体的な人生をおくれる人は、おそらく自分自身の健康をも十分に意識できる。そうした人々は、自分自身を客観的にみるメタ認知能力にも長けており、自分の思考や身体イメージも意識できる可能性が高い。こうした、認知行動学的な意味での“気づき”と“自分の外在化”を身につけた人々は自分自身をよく理解し、コントロールできる術を持つからである。つまり、自分の人生の目的や、やりたい事が明確な人間は健康観をもち、目的に向かって自身の健康を維持するための工夫を行うことができる。逆説的に言えば、よい健康観を持つ人がより良い人生を生きるのではなく、人生の目的ややりたい事が明確な人間ほど、より良い健康観を持てる可能性がある。

本発表では、① 死生観、② 人生観、③ 健康観の相互関連性を認知行動学に基づいて概説しながら、それぞれが人間の幸福とどのように関連するのかについて問題提起を行う。さらに、病気や障害をもったときにそれらはどう変化し、どのような思考と身体認知に繋がるのか、事例を提示しながら解説していく。

骨粗鬆症の診断と治療

白川崇子 首都大学東京大学院人間健康科学研究科放射線科学域

低骨量を呈する疾患に、原発性骨粗鬆症、続発性骨粗鬆症、その他（悪性腫瘍の骨転移など）がある。原発性骨粗鬆症の診断と薬物治療について述べる。これは、骨折予防につながる。

原発性骨粗鬆症の診断手順は、問診、有症状の有無、画像診断（X線撮影、MRIなど）、骨量測定、血液・尿検査を行い、続発性骨粗鬆症、低骨量をきたす他の疾患を除外する。脆弱骨折があれば、原発性骨粗鬆症と診断する。脆弱骨折がなくても、骨密度値がYAM（若年成人平均値）の70%以下、または-2.5 S.D.以下なら原発性骨粗鬆症と診断する。

原発性骨粗鬆症の薬物治療は、骨吸収抑制剤（SERM、ビスフォスホネート、抗RANKL抗体、カルシトニン）骨形成促進剤（PTH製剤）、骨代謝調節剤（活性型ビタミンD製剤、カルシウム、ビタミンK）の主なものを述べる。

一般演題発表プログラム

ポスター発表		14:00～15:00 講義室2(183)
P-1	コミュニティにおける看護職等による支援の評価に関する文献検討	高橋洋子 首都大学東京大学院
P-2	日本におけるHIV感染症/AIDS外来看護に関する文献の検討	立里優美 首都大学東京大学院
P-3	HIV/AIDS患者に特徴的な受診継続・中断要因に関する国内文献の検討 ～糖尿病・結核の受診継続・中断要因との比較～	友杉真理子 首都大学東京大学院
P-4	訪問看護ステーションにおける現任教育に関する文献検討	岸純子 首都大学東京大学院
P-5	この場に「イル」ことから自己了解獲得に向けた支援についての一考察 ～認知症クライアントへの現象学的アプローチ～	岡田直純 しもだてメディカルポータル
P-6	職場のメンタルヘルス不調の一次予防に関する過去10年間の文献研究 ～日本語論文と英語論文の研究内容の比較を通して～	荒木瑞希 首都大学東京大学院
P-7	地域在住高齢者におけるタブレット端末利用型調査法と質問紙調査法の差異	楠本泰士 東京工科大学
P-8	都市部居住女性高齢者の膝関節痛の認識と対処	中野理恵 首都大学東京大学院
P-9	看護実践能力の向上を目指した学習法の検討 ～自作動画による視聴の試み～	前田耕助 首都大学東京
P-10	「看護師の調整」の構成概念の検討 ～病院に勤務する看護師への面接調査から～	藤田厚美 首都大学東京大学院
P-11	脳性麻痺患者における呼吸機能と関節トルク・新体力テストとの関係性	池上直輝 東京工科大学
P-12	脳性麻痺患者の下肢筋肉量と筋力・筋出力の関係	今井裕紀 東京工科大学
P-13	脳性麻痺片麻痺患者の筋肉量の特徴	大村亮太 東京工科大学
P-14	重度手関節屈曲拘縮を呈した脳性麻痺児に対する手関節授動術と理学療法、装具療法の効果	加藤愛理 南多摩整形外科病院
P-15	極低出生体重児における上肢機能獲得時期の検討	内尾優 東京女子医科大学
P-16	直流前庭電気刺激が身体傾斜角度に及ぼす影響 ～対側刺激順応の効果～	浅野雄太 多摩丘陵病院
P-17	健常成人における視覚情報操作による立ち直り反応の左右比較	菊地謙 首都大学東京大学院
P-18	Head Mounted Displayを使用したアダプテーションが電動車いす操作に及ぼす影響	米井圭衣子 埼玉医科大学国際医療センター
P-19	延髄外側症候群によってLateropulsionを呈した症例に対する認知神経リハビリテーションに基づく理学療法介入～三次元動作解析による姿勢、歩行の変化～	後藤圭介 東京女子医科大学
P-20	脳卒中を経験した当事者を対象とした我が国の作業療法領域における質的研究の文献レビュー ～1990年～2017年に発表された原著論文を対象として～	相原彩香 首都大学東京大学院
P-21	がん化学療法サバイバーのしびれが1日の作業とその意味づけに与える影響 ～予備的調査～	石橋裕 首都大学東京
P-22	障害高齢者の自宅退院後における住環境整備の実施状況と移動行動との関連	太田智之 健和会補助器具センター

P-23	タブレット端末を用いた認知訓練システムの考案 ～ゲームの紹介とアンケートの回答から～	鈴木健太郎 杏林大学
P-24	放射線治療における顔認証システム開発	江面崇智 首都大学東京大学院
P-25	UVCカメラを使用した ⁶⁰ Coのエネルギースペクトルの取得	森田恭平 首都大学東京大学院
P-26	強度変調回転全身照射 (VMAT-TBI)における標的サイズに応じた適正ビーム設定の検討	高橋侑大 首都大学東京大学院
P-27	デジタルトモシンセシスにおける逐次型画像再構成の基礎検討	乳井嘉之 首都大学東京
口述発表1 座長：浅川康吉(首都大学東京大学院人間健康科学研究科理学療法科学域) 16:40～17:40 大視聴覚室		
O-1	看護師の倫理的行動に関する国内文献の動向	岡島志野 首都大学東京大学院
O-2	手術看護認定看護師に内在する「道徳的な意志」の探求	岡島志野 首都大学東京大学院
O-3	Post-lunch dipに関する検討～要因となる生活習慣と心理状態への影響～	小島優希 首都大学東京
O-4	地域在住中高齢女性における運動実施の頻度の違いが運動機能・日常生活自己効力感・運動器不安定症に及ぼす影響	木村靖夫 Inst. Fitness & Health Sciences
O-5	滝川市における「予防的健康増進プログラム (65歳大学)」の効果 ～対照群との比較～	鎌田樹寛 北海道医療大学大学院
口述発表2 座長：関根紀夫(首都大学東京大学院人間健康科学研究科放射線科学域) 16:40～17:40 講義室1(182)		
O-6	MTFチャートを用いたX線位相コントラスト画像法の解像特性評価の試み	関根紀夫 首都大学東京
O-7	低線量X線CT画像を用いた有限要素法による椎体骨強度の評価	中野渡滉希 茨城県立医療大学大学院
O-8	脳性麻痺児に対する上肢選択的筋解離術前後での機能変化と満足度の関係 ～アンケート調査による検討～	高木健志 目白大学
O-9	ロボットを用いた対戦型ゲームにもとづく転倒予防システムの開発 ～システムの紹介とこれまでの成果～	青木壘 東京工業高等専門学校